京都大学	博士（文学）	氏名	中野悠希
論文題目	ロシア語の主語と主体をめぐる諸問題		

（論文内容の要旨）

ロシア語学では、ラテン語のsubjectum「主語」に由来するподлежащеeとсубъектという二つの用語が存在する。前者のподлежащеeは形式に基づく概念で、典型的には名詞を中心とした名辞の主格で表され、人称・数・性において述語と一致する。一方、後者のсубъектは文の内容面（意味面）において広義の動作・状態の担い手を表す概念として扱われる。本論文ではподлежащеeを「主語」、субъектを「主体」と呼んで区別し、主体の定義やその特徴、主語と主体をめぐるロシア語の諸問題を考察するほか、一般言語学の観点から見たロシア語の主体の類型論的特徴付けを行う。

本論文は序章と１章から６章、そして結論の計８章から構成される。

序章では、本研究の背景と目的を述べている。ロシア語ではしばしば*Мне* жаль.「私（与格）は残念だ」や*У меня* болит голова「私は（у＋生格）頭が痛い」のように、広義の動作・状態の担い手が主格ではなく斜格（前置詞句を含む）で示されることがある。主語と主体は文中で必ずしも一致するとは限らないことから、ロシア語では形式面の概念である主語と、内容面の概念である主体という二つの用語が必要である。この点は、英語やフランス語などの典型的なSAE（標準平均欧州）言語とは異なるロシア語の特徴である。本論文の目的は、主語を基点にしてロシア語の主体を定義し、斜格によって表される主体をめぐる諸問題を論じることである。とりわけ斜格主体として多用される前置詞句 у＋生格の形式を中心的なテーマとして扱う。

第１章「主体と主語特性」では、従来の研究における主体の判断基準に基づき、主体が持ちうる特性を３つ定めた。それらは、①主格という形態論的な主語特性、②≪動作主≫、≪経験者≫、≪所有者≫、≪対象≫といった各先行研究で挙げられてきた、主語に典型的な意味役割を示す意味論的な主語特性、③無標の語順で文頭位置を占めるという語用論的な主語特性である。本研究では、主体を①②③の主語特性の束として定義し、これら３つの主語特性を備えた成分が典型的な主体（かつ主語）であり、いずれかが欠けると主語の典型から離れていくと定めた。

第２章「斜格主体と状況語の含意する行為者との同一指示」では、主体が持ち得る統語論的な主語特性について論じた。規範文法では、副分詞の行為者と節の主語は合致すべきとされる。よって、*Увидев* это жилище, *у меня* сложилось самое плохое впечатление「この住居を見て、私には最悪の印象が生まれた」のように、副分詞の行為者が節の斜格主体と合致する例は非規範的とされる。一方で、副分詞に対応する状況語при виде「～を見て」を用いた例では、その行為者が節の斜格主体と合致する例

がコーパス上に高頻度で見られ、規範的な適格性の高さが示唆される。これは、副分詞ではその行為者と合致する成分の決定が［主語―述語］という統語構造のレベルで行われているのに対し、при видеではその行為者と合致する成分の決定が［主体―叙述特徴］という意味構造のレベルで行われているためである。при видеの行為者と合致する形式として最も一般的なのは、y＋生格である。y＋生格は≪所有者≫や≪経験者≫といった主体に典型的な意味役割を持ち得る。

第３章「y＋生格と再帰代名詞・再帰所有代名詞との照応」では、y＋生格で表される主体と再帰代名詞・再帰所有代名詞との照応の問題を扱った。この照応は斜格主体が持つ統語的な主語特性であり、y＋生格は再帰代名詞「自分（を、に）」や再帰所有代名詞「自分の」の先行詞になり得る。再帰所有代名詞については、「自分の」という本来的意味ではなく、「自分自身の」「独自の」という付加的な意味を持つ場合にy＋生格と照応するとされてきた。本章ではコーパス調査とインフォーマント調査により、На *своих* помощниках у *него* рука не поднималась. 「自分の助手たちには彼は手が上がらなかった」のような例において、再帰所有代名詞が本来的な用法で用いられていること、さらにその場合でもy＋生格と再帰所有代名詞の照応が実現する２つの条件を明らかにした。その条件とは、A．所有代名詞がy＋生格と同一文中に共起する述語修飾成分に現れること（統語条件）、B．所有代名詞の被修飾語がy+生格の＜領域＞の外にあること（意味条件）である。

第４章「スラヴ語のy/u＋生格と所有構文」では、ロシア語と他のスラヴ語における前置詞y（キリル文字表記）/u（ラテン文字表記）＋生格の用法を共時的・通時的に比較した。他のスラヴ語では「持つ」という動詞を用いた所有構文が一般的であるのに対し、ロシア語では*У меня есть* машина「私には車がある」のように「ある」という、英語のbe動詞に当たる動詞を組み合わせたy＋生格で所有構文が作られる。これは東スラヴ語のみに見られる。y/u＋生格による所有構文は共通スラヴ語に遡る構文であり、その成立は前置詞y/uが＜近接＞の意味から＜領域＞の意味を派生させたことであると考えられる。現代の西および南スラヴ語の前置詞y/uにも＜領域＞の意味は保たれているが、他の前置詞との競合や動詞「持つ」の広範な使用により、y/u＋生格による所有構文の発展は阻まれている。なお、意味と用法においてロシア語の前置詞yに最も近いのはポーランド語の前置詞uである。

第５章「ロシア語とポーランド語のy/u＋生格」では、前置詞y/uの用法が近い両言語におけるy/u＋生格の分布や使用条件をコーパス調査とインフォーマント調査により比較した。ポーランド語のu＋生格がロシア語のy＋生格ほど広範に分布しない要因として、ポーランド語では≪経験者≫が与格で示され、一部の動詞の補語として用いられる場合を除いてu＋生格が≪経験者≫を表さないこと、動詞mieć「持つ」の発達により≪所有者≫は客観的な観察の対象の場合のみに示されることが挙げられる。また、y/u＋生格が被使役者を表す奉仕使役構文は両言語に見られるが、インフォーマント調

査の結果、ロシア語のy＋生格は≪動作主≫、ポーランド語のu＋生格は≪場所≫の性格が強いことが明らかになった。

第６章「斜格主体多用の傾向に見るロシア語の類型的特徴」では、スラヴ諸語の中でロシア語が斜格主体を多用する傾向に着目し、言語類型論の観点からその特徴づけを行った。「持つ」型言語と「ある」型言語、「する」型言語と「なる」型言語の枠組みで見ると、ロシア語は「ある」型言語としての性格を顕著に示し、その延長として「なる」型言語の特徴も示す。「ある」型言語の典型とも言えるy＋生格の所有構文はバルト・フィン語との接触という外的な要因によって発達したと従来指摘されてきたが、本論文では内的な要因によっても説明が可能であることを指摘した。次に、主語優勢言語か主題優勢言語かという枠組みで見ると、ロシア語は主題表示に構文法を基本としないという点で主語優勢言語寄りである。一方で、主体をその形式如何に関わらず主題に据える傾向が強いという点では主体優勢言語である。主体優勢の特徴が得られた背景には、コピュラの衰退と人称代名詞の発達がある。斜格主体は人称代名詞で表されやすいが、コピュラの衰退に伴って人称表示の役割が大きくなり、人称代名詞が文頭に置かれやすくなった。この語用論的な主語特性こそが、斜格主体の発展を促進したと結論づけた。

第７章「結論」では、各章の議論を総括した。

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、ロシア語における主語と主体の諸問題を多角的に扱った研究である。ロシア語学という個別言語学にとどまらず、スラヴ語学、言語類型論という一般言語学の視点、さらには通時と共時の視点から広く論じている。

序章では、ロシア語学における主語と主体の概念と、本論文で扱う諸現象が紹介されている。筆者は、主格で示され、いわゆる“文法上の主語”である「主語」と、「主語」の他にいわゆる“意味上の主語”も含む、より広い意味概念の「主体」とを区別している。

第１章では、ロシア語学における主語と主体の先行研究を整理し、本論文で扱う主語と主体の定義や関係を論じた。従来、文中のどの成分が主体であるかの判断基準は、パラフレーズ、意味役割、述語との結びつき、語順であった。筆者はこれらの基準をもとにして、ある成分を主体とみなす判断基準として３つの主語特性（①形態論的、②意味論的、③語用論的）を挙げている。筆者は主体を狭く定義するのではなく、①の形態論（形式的に主格であり、主語）を中心とする連続体として、より重層的に捉えている。実際、Сарай зажгло молнией「納屋（対格）は雷で（造格）焼けた（中性形過去）」のようなロシア語の自然現象を指す文では、そもそも主格で現れる成分（主格／主語）がなく、自然現象とそれに影響を受ける事物のどちらも主体と見なせる。このような文の場合、主体を一面的に枠づけるよりも、幅を持った連続体として捉える筆者のアプローチは妥当と言える。

第２章では、文中における状況語の行為者と斜格主体の同一指示の問題を取り扱っている。規範文法では認められていないものの、副分詞の行為者と節の主語が一致しない文はロシア語において散発的に見られる。筆者は副分詞 увидев「～を見て」の言い換えとなる状況語 при виде に着目し、副分詞の場合と比較して、状況語では見る行為者と節の斜格主体が合致する傾向がより高いことを、コーパス調査によって明らかにした。大量の用例を手作業で丹念に確認したコーパス調査によって得られた量的・質的知見には説得力がある。

第３章では、y＋生格で表される主体と再帰代名詞・再帰所有代名詞の照応の問題が論じられている。従来の研究では、y＋主体と照応する再帰所有代名詞は付加的な意味を持つとされてきた。筆者はコーパス調査とインフォーマント調査において、主体と照応する再帰所有代名詞と人称所有代名詞の許容度を調べ、付加的な意味がない場合においても一定の統語条件と意味条件が満たされれば照応が可能であることを明らかにした。先行研究で示唆されていた再帰所有代名詞の使用に関する世代別の差は今回明らかにならなかったものの、筆者が詳細に分析した調査結果は、再帰所有代名詞の機能を今後研究する上で貴重なデータである。

第４章は、スラヴ諸語における所有構文や前置詞y/uの機能をまとめており、第５章で扱うロシア語とポーランド語の対照研究のための準備的な章となっている。所有構文で「持つ」ではなく「ある」という動詞を使うのは、スラヴ諸語の中でロシア語を

含む東スラヴ語に特有の現象である。ロシア語の北部方言では、y＋生格は完了構文において≪動作主≫を示す形式として確立しており、本論文で扱う主体を示す形式と類似する。本論文は基本的には現代ロシア語を扱った共時的研究であるものの、本章ではスラヴ諸語の歴史的変化といった通時的視点と通言語的視点、標準語に対して方言といった言語に関する社会的視点を取り入れており、筆者の問題意識の広さがうかがえる。

第５章では、ロシア語とポーランド語におけるy/u＋生格の対照研究が扱われている。ロシア語とポーランド語のy/u＋生格をここまで本格的に扱った対照研究は世界的にも珍しく、スラヴ語対照研究への大きな貢献と言える。≪経験者≫を示すのはロシア語ではy＋生格、ポーランド語では与格という両言語の違いが明確に出ている。ポーランド語の前置詞u＋生格は客観的な観察対象の≪所有者≫でしか使用されないなど、詳細な記述も行っている。

第６章では、日本語などの非スラヴ語のデータも用いて、「持つ」型言語と「ある」型言語、「する」言語と「なる」言語、主語優勢言語と主題優勢言語の観点からロシア語の類型論を論じている。最後の点においては、ロシア語が主体優勢言語でもあることにも触れ、他言語と比べた際のロシア語の特徴を明らかにしたと同時に、本研究を通して扱ったy＋生格の機能の広さが改めて強調される形となった。

本論文を通じてとりわけ高く評価できるのは、データに真摯に向き合う筆者の姿勢が活かされた第２章、第３章、第５章で、量的・質的観点から実証的な記述研究となっている。膨大な関連領域の先行研究の知見や様々な言語データを集めた第１章と第６章もまた、ロシア語学や類型論にとって参照的な性格を持ち、価値あるものである。

とは言え、本論文にも瑕疵がないわけではない。①コーパス調査やインフォーマント調査を行った章と比較して、先行研究の整理や問題提起、理論的考察が中心の１章、４章、６章では筆者の研究の独創性や新規性が必ずしも見えやすくはなかった点、②主体とはあくまで言語学上の便宜的な概念であることを考慮すると、主体を本来的に存在すべきものとする立場をとることの有効性の説明がやや希薄な点、③「主語」や「主体」といった本研究で重要な概念も含め、個々の用語や表現によりいっそう厳密な説明や定義づけが必要である点、④規範で逸脱とみなされたり、許容されたりする言語現象を挙げる際に、筆者自身が規範をどのように理解しているかが見えにくかった点などである。しかしながら、これらの短所は筆者自身もよく自覚しており、今後の推敲と研鑽において克服されるだろうことが十分に期待できる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2023年8月7日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問をおこなった結果、合格と認めた。